

島本町文化財調査報告書

第 23 集

広瀬遺跡発掘調査概要報告

平成 25 年 3 月

島本町教育委員会

序 文

本報告書は原因者による宅地開発に伴って、平成23年度から平成24年度にわたり実施した発掘調査の成果を報告するものです。

当調査地は、町内の遺跡包蔵地である「広瀬遺跡」にあたり、遺跡のほぼ中心を西国街道（旧山陽道）が走り、古くから交通の要衝として発展してきました。また、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮跡を含み、町内で重要な遺跡の一つとして注目されてきたところでもあります。

今回の調査では、中世の山陽道の一部を検出したという、非常に大きな発掘成果をあげることができました。これは、本町が交通の要衝として栄えてきたことを裏付けるばかりではなく、古代～中世にかけての「みち」を考えるうえで大きな成果であったと言えます。

最後になりましたが、発掘調査・資料整理にあたりまして、多大なご指導、ご協力を賜りました関係諸機関の皆様、また発掘調査にご理解、ご協力いただきました土地所有者の方や近隣の皆様方には紙面をおかりして、深く感謝しお礼を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年3月

島本町教育委員会
教育長 岡本克己

例 言

1. 本書は、平成23年度原因者負担金事業として、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した、広瀬遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局生涯学習課嘱託職員久保直子を担当とし、平成24年2月20日に着手し、4月20日に終了した。島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、平成25年3月29日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)

【調査員】 木村 友紀 坂根 瞬

【調査補助員】 布施 英子 原 由美子

4. 本書の執筆は久保(本文、遺物編)・木村(瓦・埴編)が行ない、作成・編集は久保、坂根が行なった。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。
6. 現地作業及び整理作業においては、下記の関係機関ならびに方々には貴重なご指導ご教示を賜った。記してここに感謝の意を表します。(敬称略、同不順)

大阪府教育委員会事務局文化財保護課、帝塚山大学 森 郁夫、八幡市教育委員会 小森俊寛・大洞 真白、大山崎町教育委員会 林 亨、(公)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長 中尾 芳治、(財)長岡京市埋蔵文化財調査センター 木村 泰彦

凡 例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海面 (T.P. [Tokyo Peil]) を基準とした数値である。方位は、国土座標第IV系における座標北である。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。
3. 遺構記号については、以下の通りである。
P : ピット SD : 溝 SE : 井戸 SX : 性格不明遺構
4. 本書で使用している北は、特に断りのない限りは「真北」を示す。

目 次

序 文

例 言・凡 例

目 次

挿 図 目 次

付 表 目 次

図 版 目 次

第1章 はじめに

島本町の地理的・歴史的概要 ----- 1

第2章 遺跡の概要 ----- 2

第3章 広瀬遺跡発掘調査

調査経緯 ----- 3

1) 基本層位 ----- 4

2) 検出遺構

《西調査区》 ----- 6

《東調査区》 ----- 9

3) 出土遺物 ----- 11

第4章 まとめ ----- 19

挿図目次

島本町内遺跡分布図 (1/25,000)

第1図 島本町の位置図 ----- 1

第2図 古い築屋の看板 ----- 2

第3図 調査地位置図 (1/4,000) ----- 4

第4図 地層断面図 (1/80) ----- 5

第5図 石列平面図・断面図 (1/40) ----- 6

第6図 石列 (西から) ----- 6

第7図 第2遺構面平面図 (1/150) ----- 7

第8図 第3遺構面平面図 (1/150) ----- 8

第9図 道路状遺構平面図・断面図 (1/100) ----- 9

第10図 道路状遺構検出状況 ----- 10

第11図	出土遺物実測図 (1/4)	-----	11
第12図	出土遺物実測図 (1/4)	-----	12
第13図	出土遺物実測図 (1/4)	-----	14
第14図	出土遺物実測図 (1/3・1/4)	-----	15
第15図	出土遺物実測図 (1/4)	-----	17
第16図	出土遺物 (錢貨) 拓影 (1/1)	-----	18

付表目次

付表 1	本報告書掲載遺跡	-----	3
付表 2	出土遺物観察表	-----	22・23
付表 3	瓦観察表	-----	24
付表 4	埴観察表	-----	24

図版目次

図版一	広瀬遺跡 (西調査区) 石列検出状況 (北より) 第3遺構面全景 (北東より)
図版二	広瀬遺跡 (東調査区) 第2遺構面全景 (北西より) 焼土層断面 (南西より)
図版三	広瀬遺跡 (東・西調査区) 柱穴検出状況 (北より) 井戸SE27検出状況 (北より) 焼土検出状況 (西より) 羽釜出土状況、埴出土状況、焼石出土状況、錢貨出土状況
図版四	広瀬遺跡 (東調査区) 道路状遺構検出状況 (南西より) 道路状遺構検出状況 (上面より)
図版五	広瀬遺跡出土遺物 (土師器・瓦器・須恵器)
図版六	広瀬遺跡出土遺物 (羽釜・鍋)
図版七	広瀬遺跡出土遺物 (国産陶磁器・輸入陶磁器)
図版八	広瀬遺跡出土遺物 (瓦・埴、錢貨)



1. 山崎古墓 2. [府指] 有文 関大明神社本殿 3. 鈴谷瓦窯跡 4. [重文] 水無瀬神宮客殿・茶室 5. 水無瀬神社跡
 6. 桜井駅跡 (6) [史] 桜井駅跡 (楠木正成伝承地) 7. 伝待宵小侍従墓 8. 越谷遺跡 9. 源吾山古墳群 10. 水無瀬荘跡
 11. 御所池瓦窯跡 12. 桜井遺跡 13. 桜井御所跡 14. 広瀬遺跡 15. 広瀬南遺跡 16. [府指] 天 天代のヤマモモ
 17. [府指] 天 大沢のヌギ 18. 山崎西遺跡 19. 神内古墳群 20. 山崎東遺跡 21. [府指] 天 若山神社「ツブラジイ林」
 22. 御所ノ平遺跡 23. 青葉遺跡 24. 広瀬富田遺跡 25. 鈴谷遺跡 1001. 西国街道

島本町内遺跡分布図 (1/25,000)

第1章 はじめに

島本町の地理的・歴史的概要

島本町は、大阪府の北東端、京都府との境に位置する面積16.78km²の町である。北は京都市西京区と長岡京市、北東は大山崎町、東南は八幡市、南は枚方市、西は高槻市に隣接する。町の面積全体の約7割を山岳丘陵地が占め、人口約3万人の自然豊かな町で、町域の東南部で、木津川、宇治川、桂川の三川が合流して南西に流れる淀川が造り出す地形は、北側の天王山山塊と南の生駒山地の南端となる八幡市の男山丘陵とを分ける山崎狭隘部と呼ばれる。

自然環境の面でも「大沢のスギ」や「尺代のヤマモモ」「若山神社のツブラジイ林」が大阪府指定の天然記念物に指定されており、豊かな自然が残されている土地でもある。また水無瀬神宮の「難宮の水」は後鳥羽上皇が造営した水無瀬神宮にちなんで名付けられたと言われており、昭和60年7月に大阪府内で唯一、環境庁認定の「名水百選」に選ばれている。

また、島本町では、国指定史跡桜井駅跡をはじめとして、多くの遺跡や文化財が周知されている。町内に流れる水無瀬川の西岸部には「東大寺」の地名が残り、この地には奈良の東大寺に瓦を供給したのではないかとされる鈴谷瓦窯があり、また、東大寺正倉院に残る日本最古の絵図『摂津国水無瀬絵図』に描かれる奈良東大寺領の莊園「水無瀬莊」が造営された。

都が平城京から長岡京、平安京へと遷都されていくにつれ、島本町は水・陸の交通上重要な位置を占めるようになっていった。『延喜式』にある山崎駅の記述や『土佐日記』『更級日記』などには、山崎津の賑わう様子が記載されている。平安時代以降には、桓武天皇や嵯峨天皇が頻繁に訪れ、中でも後鳥羽上皇は、鎌倉時代のはじめに水無瀬難宮を造営し遊興の時を過ごした。

中世期以降には、『太平記』の記述で有名な国史跡桜井駅跡がある。この史跡は延元元年(1336)足利尊氏の大軍を迎え撃つため京都を發った楠木正成がここで長子の正行に遺訓を残して河内へと引き返らせた「楠公父子別れの地」として広く世に知られ、現在もこの地を訪れる観光客は後を絶たない。また、この国史跡桜井駅跡は、奈良時代の初め、京から西国に向かう道筋に



第1図 島本町の位置図

設置された駅（うまや）の一つに「大原駅」が続日本紀に記され、これがこの場所を指すものとも考えられてきた。

第2章 遺跡の概要

調査地は、「水無瀬離宮跡」を含む「広瀬遺跡」内にあたり、近年開発の進む町内で、比較的広い範囲で耕作地が残されている地域である。

広瀬遺跡は、町内の東端部を北西から南東の方向に流れる水無瀬川の右岸に位置し、遺跡のほぼ中心を府道西京高槻線（西国街道）が走り、広瀬地区全域にわたる奈良時代から近世に至る大規模な遺跡である。現在まで実施した発掘調査の大きな成果を次にあげる。今回の調査地の南側約1.2kmで、平成元年に町立第一小学校プール建設に伴う調査を実施し、水無瀬荘民の生活を示唆する梁行1.6m×桁行2.3mの不等間の倉庫建物跡や、水無瀬離宮造営期にあたる13世紀代の土師器皿の土抗を検出している。その調査地の西側0.25kmでは、平成20年12月～平成21年3月の調査で中世の柱跡を発見すると共に、弥生時代から近世に至る遺物が出土している。また、この調査地の北側で、平成21年12月～平成22年1月に行なった調査では、それまで実態がよく分らなかった後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮と同時代の建物跡や瓦が初めて検出され、大きな話題となっている。

ここで水無瀬離宮について少しふれておく。後鳥羽上皇が造営した離宮として有名で、藤原定家の日記「明月記」などの史料によると、上皇は離宮に30回以上も行幸し狩猟や歌会を繰り返していたようである。離宮は最初、正治元年（1199）に現在の水無瀬神宮を中心とした水無瀬川と淀川の合流地点付近（下御所）に造営されるが、建保4年（1216）に洪水に遭い、翌年に下御所から西0.6kmの方向にある山手付近（百山地区）に新御所（上御所）の造営が行なわれたと考えられている。この遺跡に関係する調査は、平成19年に水無瀬神宮の参道南側の公園敷地内を調査し、井戸1基（近世）と室町～近世の土器が出土している。また、平成21年には、神宮東裏の駐車場の調査を行ない、中世の清や瓦類が出土している。

今回の調査でも、水無瀬離宮との関わりが十分考えられる。また、調査地のすぐ東側には西国街道（旧山陽道）が走り、隣接する高槻市や京都府大山崎町では、古代の官道とされる山陽道



第2図 古い薬屋の看板

が検出されており、この地での古代山陽道に関する遺構の検出も大いに期待された。

また、調査地は昭和初期に建築された旧家で古くは薬屋が営まれ、多くの文化財、民具などを所有しておられ、古い看板なども残されていた。

遺跡名	遺跡所在地	調査期間
広瀬遺跡	三島郡島本町広瀬一丁目883-1 地内	平成24年2月20日～4月20日

付表1 本報告書掲載遺跡

第3章 広瀬遺跡発掘調査

調査期間：平成24年2月20日（月）から4月20日（火）

調査地：大阪府三島郡島本町広瀬一丁目883-1 地内

調査面積：約400㎡

調査経緯

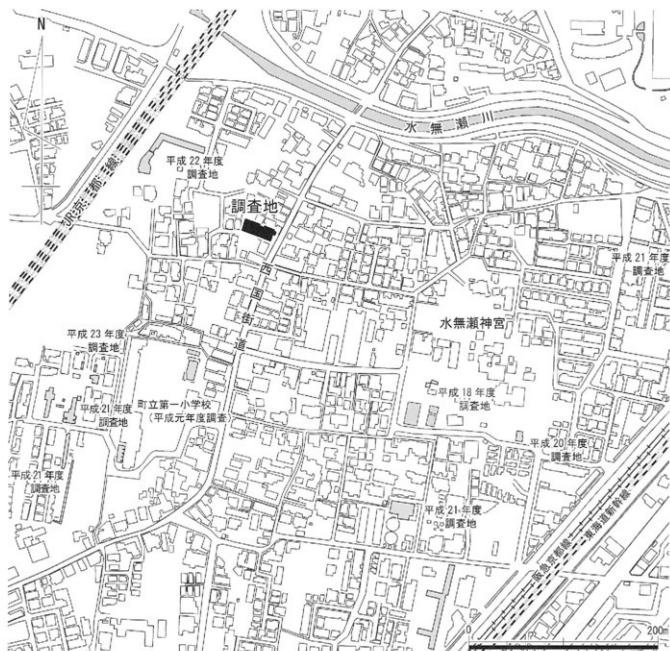
本事業は、J A たかつき島本支店事務所棟移転に伴う新築建物工事の調査である。

工事は建物建設と駐車場の設置が予定され、発掘調査範囲は掘削予定のない駐車場部分を除き、遺構に影響を及ぼすと考えられる建物建設部分を対象とした。

調査は、平成23年12月に試掘調査を実施しており、その際には建物建設予定地の東側と西側の2ヶ所に東西約2.5m、南北約2.0mのグリッドを設定し、東側では深さ約2.0mの地点で、現西国街道に並走する南北約0.6m、深さ約0.2mの溝と、その東側に固く締まった路面と思われる層を確認した。また、西側では深さ約1.8mで、中世～近世の土器を含む土坑を検出した。

これらの試掘調査の結果から、東側では近世西国街道、あるいは古代山陽道の可能性がある道路状遺構の存在と広がりの確認を行なうこと、また西側では土器の出土に伴い、土坑の明確な性格や範囲確認を行うことを目的に調査を実施することとした。

発掘調査地全体のトレンチを東西約32.0m、南北約12.0mと設定し、土を置く敷地の確保を考慮して、調査区を東側と西側に分けた。最初に西側調査区（東西約20.0m、南北約12.0m）より調査を実施し、埋戻した後、東側調査区（東西約12.0m、南北約12.0m）の調査を行なった。



第3図 調査地位置図 (1/4,000)

1) 基本層位 (第4図)

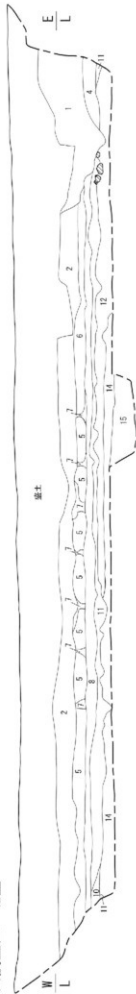
調査地は西国街道に隣接し、また北側約150mには水無瀬川があり、古くより交通の要衝として様々な土地利用が行なわれてきたと思われる。地表面より深さ約1.0～1.1mは盛土・葦土が堆積し、その下層は攪乱層を含む近世～近代と思われる約0.4mのシルト層が広がる。シルト層の下層約0.4m～0.5mは、繰返し火事に見舞われたと思われ、焼土層を含む明黄色、あるいは褐色砂質土層などが何層にもわたって堆積している (15世紀後半～17世紀前半)。これらの層位より、この場所では途切れることなく、人々の生活が繰返し営まれ、火事に見舞わ

西調査区 西壁



1. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
2. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
3. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
4. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト (灰化物入り)
5. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト (40m ~ 35m の境界面)
6. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
7. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
8. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
9. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
10. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
11. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
12. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
13. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
14. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
15. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト

西調査区 北壁

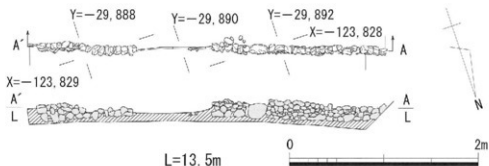


東調査区 北壁



1. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
2. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
3. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
4. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
5. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト (東)
6. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
7. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
8. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
9. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
10. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
11. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
12. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
13. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
14. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
15. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
16. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
17. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
18. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
19. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
20. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
21. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
22. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
23. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
24. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
25. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
26. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
27. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
28. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
29. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
30. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
31. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
32. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
33. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
34. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
35. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
36. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
37. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
38. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
39. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
40. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
41. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
42. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
43. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
44. Bae1. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
45. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
46. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト
47. Bae2. 376.0 西壁セリソープ地層シルト

第4図 地層断面図 (1/80)



第5図 石列平面図・断面図 (1/40)

れたりしながら、何度も建替えが行なわれたことが推測される。これらより下層は、中世層（13世紀～15世紀）で、暗褐色土層が広がり、その下層には、黄褐色の礫層が続いている。

2) 検出遺構

《西調査区》

【石組列】(第5・6図・図版一)

中央付近で、東西約7.5m、深さ約0.4mの石組列を検出した。1個約0.2～0.4mの石が整然と並べられていた。これらの石列がどういった性格のものであるかは分からないが、屋敷の敷地範囲を示す石囲みのようなものではないかと考えている。東より約20mの地点には、他の石より3倍ほどの石が1個据えられており、敷地の区切りを示すものとも考えられる。



第6図 石列(西から)

【柱穴】(第8図・図版一・三)

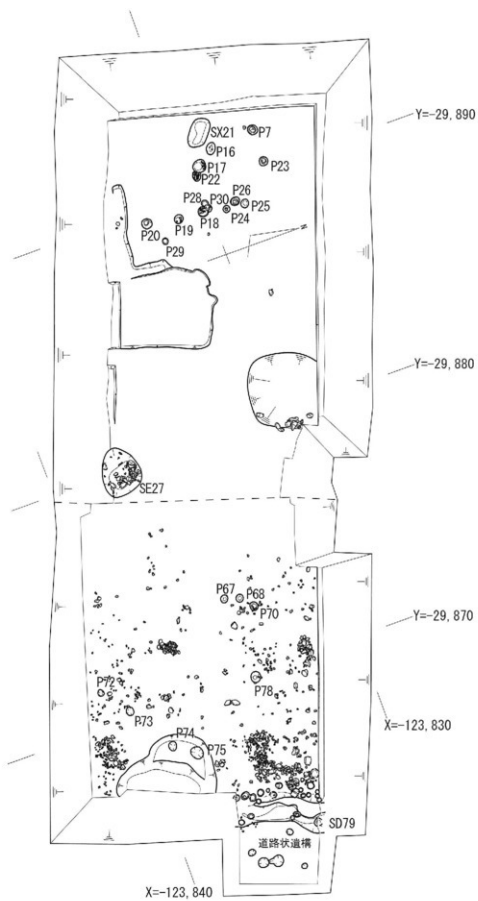
第3遺構面では、根石を持つ柱穴をいくつか検出した。(P7・18・20・22・23・24・26・30) 建物の明確な規模、方向などは柱穴が等間隔のものが見出せないため不明であるが、出土した土器などから、中世末～近世初期に複数の施設が存在したと考えられる。

【土坑S X02】(第7図)

西端で、多量の瓦質羽釜、鍋などが投擲された土坑を検出した。試掘時に一部検出しており、範囲の確認を行なったが、断面にも広がっていたため、安全を確保するため、掘りきる事はできなかった。時期は16世紀頃と考えられる。

【土坑S X21】(第8図)

西端で検出した。焼土が多量に混じり、周辺施設のゴミ穴の可能性が考えられる。また、焼成を受けた多くの壁土が混入しており、この付近に建物があったことや、その建物が火事があったことが伺われる。時期は16世紀頃と考えられる。



第 8 図 第 3 遺構面平面図 (1 / 150)

【井戸SE27】(第7・8図・図版三)

東端で石組井戸を検出した。上部は崩落して、底の部分しか残っていなかった。16世紀頃に造られたと考えられる。

《東調査区》

【焼土】(第7図・図版三)

第2遺構面で、焼土の広がる層を検出した。炭・土器などが混じっており、断面にも数ヶ所見ることができる。出土した遺物にも火を受けて器表面の炭素が焼失しているものが多数見られることより、広範囲に渡って何度も火災があったものと思われる。

【柱穴】(第8図)

第3遺構面で、いくつか柱穴を検出したが、明確な建物は見いだせなかった。

【SD79】(第8・9・10図・図版四)

東辺で検出した。この溝の一部はすでに試掘の段階で検出していた。今回の調査ではさらに明確となり、幅約0.5m~0.7m、深さ約0.3mを測り、検出した長さは南北に約3.0mであった。検出状況より北方向にさらに延びると考えられる。出土遺物が少ないため、時代の特定は難しいが、中世に作られたものと考えられる。

【道路状遺構】(第8・9・10図・図版四)

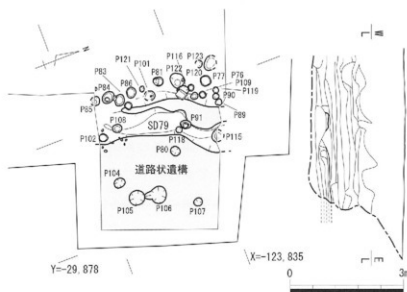
上記の溝SD79と併せて記述する。現西国街道に並走して検出しており、路面は薄い砂質層の上に小礫を密に敷いて形成されており、上面は踏み固められ、非常に固く締まった状態を呈する。検出面積が狭かったため、路面幅は確認出来なかったが、南北に加えて東側にも広がっ

ていることは壁面観察からも明らかである。

このような小礫敷きの路面は平安時代後期以降の京域内の大路・小路には数多の類例が見られる。

第8図では分かりにくいので、第4図の地層断面図と並べて第9図に拡大して再掲載した。

検出した道路状遺構は第9図左の着色部分である。溝S



第9図 道路状遺構平面図・断面図(1/100)



第10図 道路状遺構検出状況

D79は道路状遺構の西辺沿いを南北方向に延びる形で形成されたものであり、二時期の西側溝と見ている。溝内堆積土の最上部からは近世に入る遺物も出土するが、中層部から下層部には、中世の遺物が主体を成しており、最上位路面とともに、中世から近世の早い段階には機能していたものと理解される。道路状遺構は、最上位の道路下に同

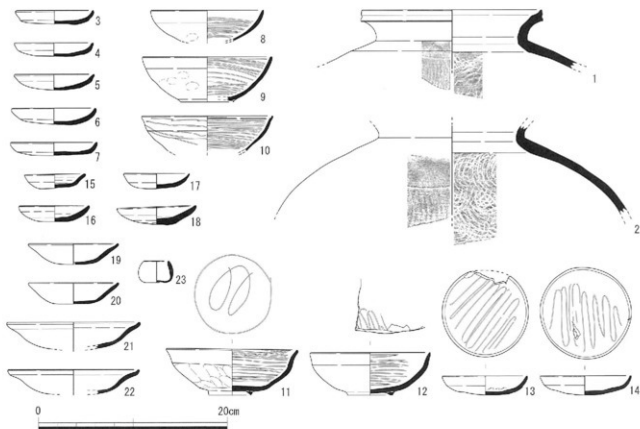
様の小石敷きの路面が2面以上確認でき、複数回の整備が加えられて積み上がったものと見られる。溝S D79の西側には、同溝に先行する幅約2.0mの南北溝が確認できる。周辺からのものを含めて、出土する遺物からは、中世前半期頃以前に機能していた、道路状遺構に伴う西側溝と考えられる。また、検出した路面西辺の溝S D79から西側の宅地東辺には、南北方向に並びを確認できるものを含めて多くの柱穴が確認でき、中には根石を含むものも見られた。柱穴列の検出状況からは現在の街並みのように、建物と道路の間に道路や側溝に平走する塼、あるいは柵列を構築していたと見られ、それらもまた、中世を通して路面の作り替えと同様か、またはそれ以上、複数回は建て替えられ継続的に維持されていたものと見られる。小石敷きの路面を有した道路状遺構は、中世の山陽道の一角であり、西辺を走る2条の南北溝はそれに伴う西側溝を検出したものと理解される。今回の調査では、最下位の路面の平面的調査までは至らなかった事もあり、断定的な理解は出来ないが、中世遺構へ混入して出土する平安時代の遺物から、道路状遺構の成立年代は、古代にまで遡る可能性は高く、今後の周辺地での調査の重要な課題となった。

また、調査対象地東辺沿いには、現在の西国街道が南北に走っているが、今回の調査の成果から、近世から近代へと修築あるいは再築され続けたと見られ、調査外の東側へと徐々に移設あるいは狭められて現代に至っているものとして理解して良いであろう。このようにみていくと、この地域の現西国街道は、やや東へはずれるが、古代から中世の山陽道もほぼ踏襲しているものと考えられる。

3) 出土遺物 (第11・12・13・14・15・16図・図版五・六・七・八)

今回の調査においては、平安時代(9世紀末～10世紀前半)の白磁碗や灰釉陶器碗が少数含まれるが、平安時代後半(10世紀末～12世紀後半)から遺物の出土量が増加傾向を見せる。しかし、大きく増加が認められるようになるのは、鎌倉時代(13世紀中頃～14世紀)以降にかけてで、このころの遺物は土師器・瓦器の食器類、及び瓦器の鍋・羽釜の煮炊具を主体とするものである。これらの中には輸入陶磁器がかなりの量含まれており、出土遺物の性格を考える上で注意しておく必要があるだろう。そして、この時期以降、近世・近代に至るまで、継続して土器が出土しているのである。このような出土状況は遺跡の盛衰を示すものと考えられる。

鎌倉時代以降、15世紀後半から16世紀前半頃に比定される土器類は、質・量ともに豊かな出土状況を呈している。このころの遺物は、やはり土師器・瓦器の食器類、及び瓦器の鍋・羽釜の煮炊具が主体を成すが、他に青磁・白磁を主とする輸入陶磁器、備前焼のすり鉢・甕、信楽焼のすり鉢などの焼きしめ陶器、瀬戸美濃の灰釉陶器碗・皿、鉄釉天目茶碗など各種の遺物が共に出土している。この時期の出土遺物については、瓦器の器表面の炭素が焼け飛んだとみられるものが多く、また、焼壁土などが多数含まれることから、輸入陶磁器や天目茶碗など高級な器物等を日常的に使用していたとみられる寺などの施設が、16世紀前半あるいは中頃に、大



第11図 出土遺物実測図(1/4)



第12図 出土遺物実測図(1/4)

きな火災などを受けたことを示すものである。しかし、16世紀末以降、近世・近代にかけての継続的な遺物の出土状況から考えられることは、この遺跡に存在した施設がかなり早くに再建され、後世まで継続的に発展してきたものと理解される。

次に個々の遺物について記述する。

第11図の中で、最も時期が古いものとして上げられるのが(1・2)の須恵器の甕である。口縁部は短く外反し、外面には平行タタキが施された後、ナデ調整を行っており、内面は青海波を顕著に残す。両者とも内・外面の調整が似通っており、同一個体の可能性もある。13世紀以前と考えられる。(3～7・15～22)は土師器の皿で、その中で(3～7)は、口径約8.5～9.0cmで口縁部にヨコナデを施している。(8～12)の瓦器椀、(13・14)の瓦器皿は地城色を持った椀葉型のもので、前述の土師器皿の時期と同じと考えられる。瓦器椀は密に暗文を残し、皿は見込み部分に暗文を呈する。(10・11)は口縁部に沈線を巡らす。時期は13世紀から14世紀後半と考える。(15～22)の土師器皿の口径は小さいものであれば約6.5cm、大きいものは約14.0cmである。時期は15世紀後半から16世紀前半と考えられる。(23)はツボツボといわれる土師器の壺で、他の土器類よりは新しく16世紀以降のものと考えられる。第12図の(24～26・28～33)は瓦質の羽釜である。(24)は出土した羽釜の中では全体に小振りで、丁寧なエビオサエがみられる。(25・26)は脚部を有するもので、(26)は出土した羽釜の中で唯一底部まで残っている。(24)を含んで13世紀から14世紀と考えられる。(27)は瓦質の鍋で、14世紀から15世紀頃と考えられる。(28～33)の羽釜は、前者より少し新しく15世紀後半から16世紀前半頃と考えられる。この時期に大きな火災を受けたと考えられ、(29～31)は器表面の炭素が焼失してしまっていて、淡褐色を呈している。(34～36)は炮烙鍋で(34・35)は17世紀中頃から後半、(36)はそれよりも新しく17世紀後半から18世紀前半頃のものと考えられる。これらの羽釜・鍋は体部外面に使用痕跡と見られるススが附着しており、実用された生活用具と見られる。

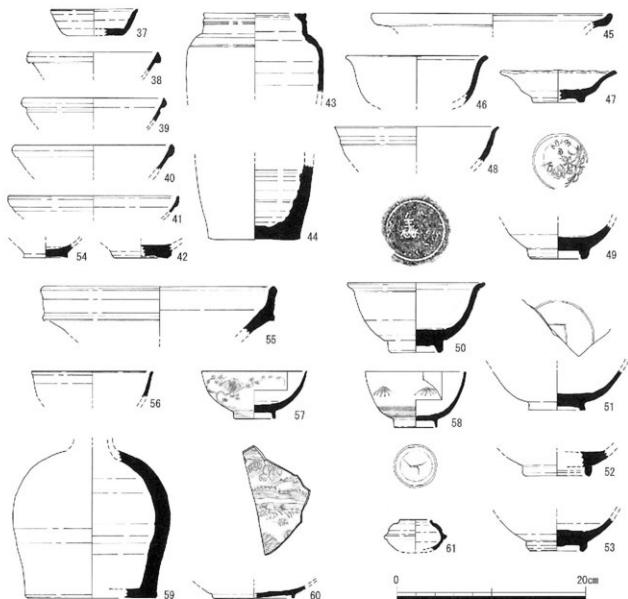
第13図の(37～53)は輸入陶磁器である。(37～41)は白磁椀で輸入陶磁器の内でも古相を呈し、平安時代後期(11世紀末から12世紀後半)と見られる。(38～41)はいずれも口縁部は玉縁状を呈する。これらの白磁椀は鎌倉時代頃まで使用が継続していた可能性も考えておきたい。(37)は口剥ぎの皿である。(42)は(38～41)の口縁を持つ椀の底部である。(43・44)は青磁の壺であり、13世紀から14世紀の時間幅の内に位置付けておく。両者は同一個体と考えられる。(45)は青磁の盤であり(46・49～53)は青磁椀で、(49)は見込み部分に菊花文が見える。(50)は「寿」とも読める文字の反転が刻印されている。(51)の見込み部分にも刻印が見えるが欠損しているため文様の詳細はわからない。(47)は青磁の皿で口縁部を輪花状としている。(48)は白磁椀である。(45～53)は時期を15世紀後半から16世紀前半頃と考える。(54)

は、ただ一点であるが緑釉陶器の小椀が出土しており、平底で底部に糸きりを残している。

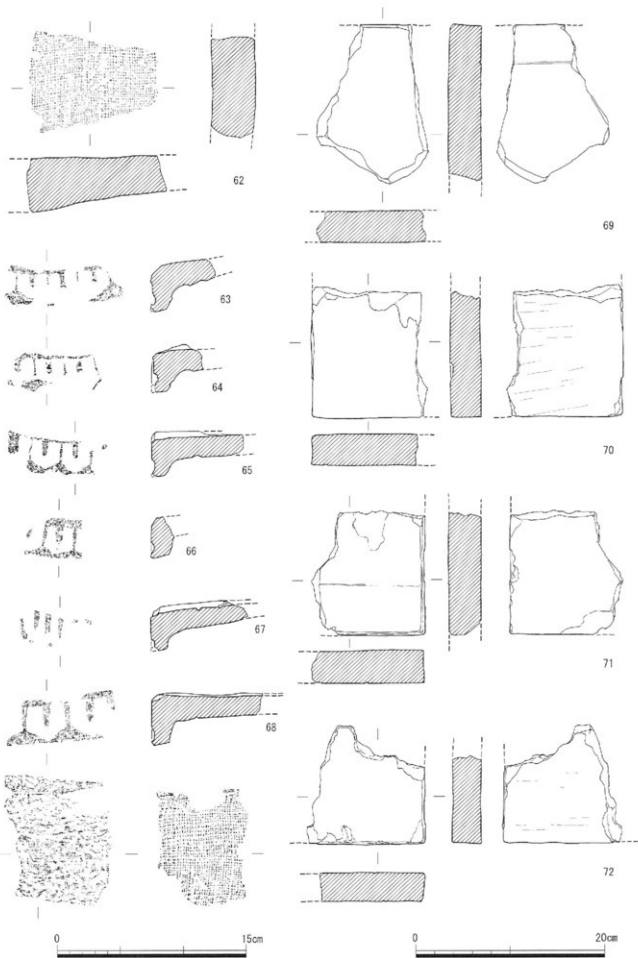
国産陶磁器の(55)は備前焼のすり鉢の口縁部、(59)は信楽焼の壺の体部で、いずれも16世紀代頃と見ておきたい。(56～58・60)は肥前系の椀である。(56)は青磁椀で(57・58・60)は染付の椀・皿、時期はいずれも17世紀後半頃と考えられる。(61)はミニチュアの土師質の茶釜で16～17世紀頃と思われる。

次に瓦類について記述する。

今回の調査地では、少なからず瓦が出土しているが、その大半は近世以降の瓦であり、中世以前の瓦は東西両調査区をあわせて40点である。その内、平安時代末期から鎌倉時代頃とみられる瓦は28点、室町時代の瓦は10点である。また、丸瓦と平瓦に各1点ずつ非常に厚い瓦が



第13図 出土遺物実測図(1/4)



第14図 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

出土しており、小破片であるためその年代を明言することはできないが、それらは古代瓦の可能性がある。

出土した7点の軒瓦は、全て軒平瓦であり、軒丸瓦は出土していない。

(62)は曲線型の軒平瓦であるが、瓦当部は残存していない。平瓦部凹面は粗い布目痕が残り、凸面は縦方向のケズリによって調整をしている。(63～68)は剣頭文軒平瓦である。(63～65・67)は平瓦部凹面に細かい布目痕を残し、(68)はやや粗い布目痕を残す。凸面は指オサエ痕が顕著に残り、ナデやケズリといった調整の痕跡は見えない。(64)には平瓦部凹面に2本の平行する直線が、ヘラ書きによって刻まれている。(65～67)の平瓦部凸面と瓦当部の接合部分付近には、凹型成形台圧痕かと思われる痕跡が残る。

剣頭文軒平瓦は、本町では平成21年度の広瀬遺跡(国木原)の調査の際に多く出土しており、今回出土した軒平瓦の中にも、平成21年度の調査で出土した剣頭文軒平瓦と同範のものが存在する。(63・64)は、平成21年度の調査報告書内において、第1型式第1種と呼称しているものであり、(65・66)は第1型式第3種、(67)は第1型式第13種と呼称しているものである。

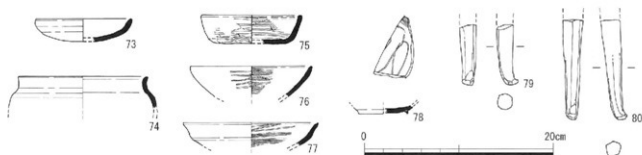
(68)は町内では新種の剣頭文軒平瓦である。

(63・64・68)は、瓦当面・瓦当裏面に布目痕が残っており、折り曲げ技法によって製作されている京都産の瓦である。(65・66)には、瓦当面・瓦当裏面に布目痕は見られないが、平成21年度の調査においては、瓦当裏面に布目痕が見られる第1型式第3種のもので出土しており、今回出土した(65・66)も折り曲げ技法で製作された京都産の瓦である可能性が高いと思われる。軒瓦は7点と非常に少ないが、今回の調査地付近に京都産を含む剣頭文軒平瓦を用いた平安時代末期～鎌倉時代に営まれた建物が、存在したことが想定できる。また、平成21年度の調査成果も含めて考えると、この建物は水無瀬離宮に伴う建物と推断できる。

(69～72)は、無文の塼であり、建物の床面に敷かれたものであると思われる。片面はケズリによって形状を整えた後、ナデによって表面を調整している。それに対して、もう片面は軽くケズリやナデによって整えているものもあるが、基本的には無調整である。また、側面はケズリを行なった後、ナデを施している。(71)のみ、強い燻しがかけている。これらの塼の年代を推定することは難しいが、(71)のように強い燻しがかけているものも存在することから考えると、室町時代後半の瓦の年代に属するものではないかと思われる。

今回の調査地から室町時代後半頃を中心とする時期の瓦や塼が出土することから、その頃に付近に寺院などといった瓦葺建物が存在していたと想定できる。図化していないが、この時期の瓦には被熱して橙色を呈しているものが多くあり、この瓦葺建物は室町時代後半以降に火災にあったということも推察できる。

次に第15図に掲載した、遺路状遺構周辺より出土した遺物について記述する。



第15図 出土遺物実測図(1/4)

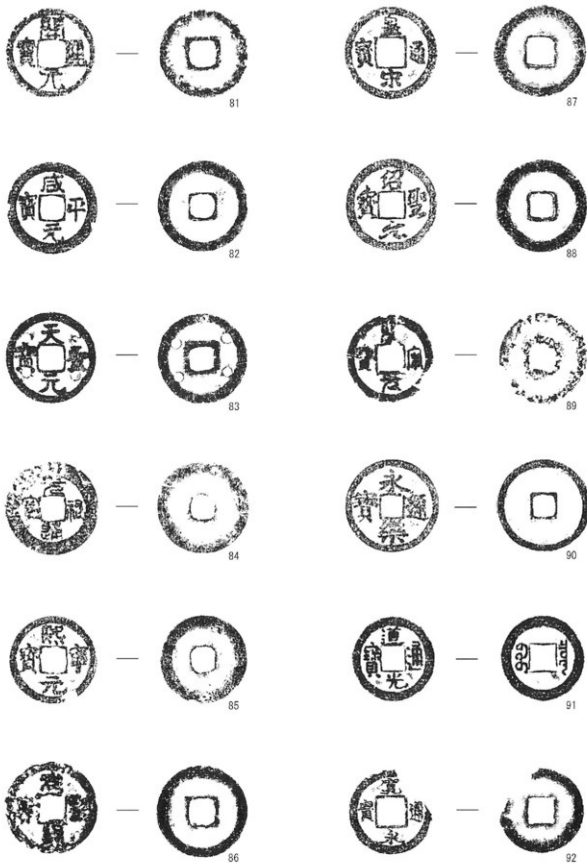
(73)は土師器皿で、口径が10.4cmを測り、口縁形態から、12～13世紀前半頃に比定しておく。
 (74)は土師器の甕の口縁部であり、10～11世紀頃の南河内産と推測しており、混入品の可能性が高い。(75～80)は瓦器である。(75)は杯であり、内外面に横方向のヘラミガキが残る。淡褐色を呈した土師質となっているが、火災等によって炭素が焼失したものとみしておく。(76～78)は碗の口縁部と底部で、(78)は見込み部分に暗文がみえる。(79・80)は三足の足が付く鼎形の羽釜の脚端部である。いずれの瓦器類も13世紀頃のものと考えられる。

第16図に拓影、図版八に写真を掲載した銭貨について記述する。

今回の調査で銭貨は東調査区の包含層から主に出土しており、合わせて25枚であった。その内、種類の分かるものは17枚で、残りの8枚は文字の解読の困難なものや破片で、中には原型を留めないものもあった。

種類は豊富で、開元通宝を初め、全部で14種類に及ぶ。その内掲載したものは、開元通宝(唐銭)、咸平通宝(宋銭)、天聖元宝(宋銭)、元祐通宝(宋銭)、熙寧元宝(宋銭)、元豊通宝(宋銭)、皇宗通宝(宋銭)、紹聖元宝(宋銭)、聖宋元宝(宋銭)、永樂通宝(明銭)、道光通宝(清朝銭)、寛永通宝(和銭)の12種類であり、他に祥符元宝(宋銭)、天禧通宝(宋銭)がある。この内、清朝の銭貨である道光通宝(91)は国内での出土例はあまり知られていない貴重な資料である。このような調査規模に比して、かなりの数量の銭貨の出土に関しては、西国街道沿いに位置する当地域の経済活動の活発さを示すものと見ておきたい。

その他、今回の報告書には掲載しなかったが、硯や石鍋の破片、天目茶碗や不明金属器などが出土している。



第16圖 出土遺物（錢貨）拓影（1/1）

第4章 まとめ

今回の調査の大きな成果は、本町で初めて中世山陽道と考えられる小石敷きの路面を有した道路状遺構が、非常に良好な状態で検出されたことであり、この山陽道の成立は古代にまで遡る可能性がある。そして、本町の中心部を走る西国街道は、畿内と九州を結ぶ古代の官道である山陽道を踏襲する形で連絡と各時代の主要道として機能をつなぎ、現在に至っていることが隣接する高槻市、大山崎町の既調査によって明らかになりつつある。

古代山陽道について、検出例としてまず上げられるのは、昭和46年に国の史跡指定を受けた大阪府高槻市郡家町の嶋上都衝跡の南側、西国街道に近い場所で確認されたものである。この発見は大阪府内では初めての山陽道の検出であった。調査報告によると、路面は10~20cmの小石が敷かれ、側溝を有する道幅は約6.0mで、側溝及びこの石敷面は東西に延び、この付近では東西方向に走る、現西国街道に並走しており、8世紀から11世紀頃にかけて、数回以上整備を繰り返していたようである。

また、京都府乙訓郡大山崎町でも道路状遺構が見つかっている。検出地周辺は8世紀頃から10世紀頃の古代の集落遺跡として「百々遺跡」と名付けられている。この遺跡では、道路状遺構の東西の両側溝が確認されており、幅123mの古代の道路が走っていたこと、そして道路に沿った宅地が存在していたことが明らかとなっている。路面の重複関係等は明らかとはなっていないが、古代山陽道の路面は現西国街道の直下に存在しているものと推察される。このように、古代山陽道と考えられる側溝や路面が次々に確認されており、しかも現在の西国街道をほぼ踏襲していると考えられている。

これら周辺の発掘調査結果を踏まえて、今回の本町の調査を考察すると、道路状遺構は出土遺物の年代観や、使用頻度の高さを示す路面の状況に加えて、現西国街道に並走していることなどから、中世に機能していた山陽道の路面の一角であると理解される。この路面は現西国街道に比して、地下-2.0m程の深さに位置しており、現西国街道の路面は様々な歴史を経て、2.0m程も積み上がったものとなっている。また、検出した路面の西端は現在の西国街道西辺より約6.4m西側に位置していることになる。現在本町を走る西国街道は道幅約6mである。古代の山陽道が現西国街道にほぼ踏襲されているという従来の説に則るなら、古代から中世の山陽道は現在より道幅が広く、平安京の小路よりもやや規模の大きい道路として運用されたものと理解される。しかし、現状の西国街道との関連からは、古代山陽道は、中世から近世・近代へ至る歴史過程において位置を大きく変えることはないが、東方向へ狭められて踏襲されたものと考えられる。

道路沿いの西側には、各時代に宅地としての土地利用が続くようだ。整地層は何層にも重なりの、中には焼土層も何層も見られることから、ここでは何度も火災に遭い、家を建替え、

整地を繰り返す時期があったことも分かった。中世末期頃から近世前期頃に推定される建物では、瓦や塼を使用していたものもあり、寺院やそれに関係する施設の可能性が高いと見られる。出土遺物にも天目茶碗を含めた青磁・白磁等喫茶に関連する一級品も少なからず含まれていた。それらからも寺院関係者、あるいは経済力のある高位者の宅地の一部であったものとも推測される。

当地域の場合では近年の発掘調査の成果などから、水無瀬離宮や神宮に関わったものであるかどうかの検討も必要となるであろう。古地図によると、このあたりは水無瀬神宮の所領であり、水無瀬神宮は、当時寺院施設を伴う宮寺であったことが知られており、当地の施設も神宮と直接関連するものであったと考えられる。

以上のように、今回の調査成果は本町のみならず、周辺地域や古代の山陽道の形成を考える上でも、非常に大きな発見であったといえる。平成21年度の調査で検出した水無瀬離宮と同時代の建物跡や、平成23年度の調査で検出した人為的な石敷や数枚にも及ぶ土師器皿の投機遺構など、調査地周辺では一般的な宅地では見られない遺構の検出が続いている。これらの調査の成果を総合し、水無瀬離宮や神宮との関わり、また、周辺地域の土地利用などについて検討を進めて行くことが、今後の調査への大きな課題となるであろう。それには、計画的な遺跡の調査を行ない、その保護・保全に努めていく必要がある。また、こうした調査をはじめとする文化財保護に係る施策は申請者や町民の方々の理解・協力に成り立つもので、今後ともそうした助力を求めながら保護に努めていきたい。

〈参考文献〉

- 『島本町史 本文編』1975年 島本町役場
- 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第1集 1991年 島本町教育委員会
- 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第17集 2011年 島本町教育委員会
- 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第18集 2012年 島本町教育委員会
- 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第20集 2012年 島本町教育委員会
- 『高槻市史 第6巻』郡家川西遺跡 1973年 高槻市役所
- 『京都府遺跡調査報告 第24冊』百々遺跡 1998年 (財)京都府埋蔵文化財調査センター
- 『大山崎町史 本文編』1983年 大山崎役場

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第4集』長岡京跡右京第69次（7ANSDD地区）発掘調査概報 1984年 大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第19集』大山崎町第34次（7YY MSNM-7地区）遺跡確認調査概要 2000年 大山崎町教育委員会

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第21集』大山崎町第29次遺跡確認調査（7YY MSDD-4）発掘調査報告 2000年 大山崎町教育委員会

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第24集』大山崎町第18次遺跡確認調査（7YY MSNM-6地区）発掘調査報告 2003年 大山崎町教育委員会

『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ（1974・1975年度）』1979年 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会

『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ（1976年度）』1980年 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会

『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ（1977～1981年度）』1981年 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会

『京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第15冊』1997年 （財）京都市埋蔵文化財研究所

探出 番号	図面 番号	番号	遺構	種類	器形	法量			胎土	焼成	色調	備考
						口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)				
11	五	1	東山遺区 遺構19(西)棟裏	須恵器	壺	19.1	(6.2)		密	良好	5Y8/1 灰	
11	五	2	東山遺区 遺構19	須恵器	壺		(9.5)		密	良好	5Y8/1 灰	
11	五	3	西瀬遺区 跡部北端(西)	土師器	皿	8.3	1.4		やや密	良好	10Y7/4 淡黄緑	
11	五	4	西瀬遺区 跡部北端(西)	土師器	皿	8.4	1.4		やや密	良好	10Y7/4 紅点ノ黄緑	
11	五	5	西瀬遺区 跡部北端(西)	土師器	皿	8.5	1.65		密	良好	10Y7/4 紅点ノ黄緑	
11	五	6	西瀬遺区 跡部北端(西)	土師器	皿	8.8	1.7		やや密	良好	7.5Y7/4 紅点ノ黄緑	
11	五	7	西瀬遺区 跡部北端(西)	土師器	皿	9.2	1.4		やや密	良好	7.5Y7/4 淡黄緑	
11	五	8	西瀬遺区 跡部北端(西) 55.6.8	瓦器	碗	12.0	3.25		密	良好	N5-1 灰	
11	五	9	西瀬遺区 跡部北端(西)	瓦器	碗	13.7	4.8	5.6	密	良好	2.5Y8/1 灰白	
11	五	10	西瀬遺区 東山遺区跡部倉	瓦器	碗	13.9	3.7		密	良好	5Y8/1 灰白	
11	五	11	東野遺区 5079(東遺区内)	瓦器	碗	14.0	5.2	4.5	密	良好	5Y8/1 灰	
11	五	12	西瀬遺区 跡部北端(西)	瓦器	碗	12.8	4.5	4.8	密	良好	7.5Y8/1 灰	
11	五	13	西瀬遺区 跡部北端(西)	瓦器	皿	9.0	2.0		密	良好	7.5Y4/1 灰	
11	五	14	西瀬遺区 跡部北端(西)	瓦器	皿	9.5	2.05		密	良好	7.5Y4/1 灰	
11	五	15	西瀬遺区 跡部北端(西)	土師器	皿	6.5	1.6	3.3	密	良好	7.5Y8/2 緑	
11	五	16	西瀬遺区 埋込内3+4	土師器	皿	7.5	1.7	3.9	密	良好	10Y7/4 紅点ノ黄緑	
11	五	17	西瀬遺区 埋込内3(埋)	土師器	皿	7.0	1.6	3.8	密	良好	10Y7/4 淡黄緑	
11	五	18	西瀬遺区 埋込内3+4	土師器	皿	8.4	2.0	3.7	密	良好	10Y7/4 鮮黄褐色	
11	五	19	東野遺区 15cm 下打	土師器	皿	9.6	2.2		密	良好	7.5Y7/4 緑	
11	五	20	東野遺区 15cm 下打	土師器	皿	9.6	2.25		密	良好	7.5Y7/4 緑	
11	五	21	西瀬遺区 東山遺区跡部倉(東)	土師器	皿	14.2	3.0		密	良好	7.5Y7/4 緑	
11	五	22	東野遺区 15cm 下打	土師器	皿	14.0	2.6		密	良好	5Y7/4 緑	
11	五	23	西瀬遺区 埋込内3+4	土師器	ツボツボ	2.8	2.3		密	良好	10Y7/2 灰白	
12	六	24	西瀬遺区 西段土坑	瓦器	羽釜	17.25	(10.1)		密	良好	2.5Y2/1 黒	
12	六	25	西瀬遺区 西段土坑	瓦器	羽釜	17.9	14.45		密	良好	2.5Y5/1 黄鉄	
12	六	26	西瀬遺区 西段土坑	瓦器	羽釜	18.4	14.7		密	良好	2.5Y3/1 黒緑	
12	六	27	西瀬遺区 西段土坑	土師器	鍋	27.8	13.4		密	良好	2.5Y1/2 黄鉄	
12	六	28	東野遺区 E1室内	土師器	羽釜	26.2	(14.3)		密	良好	10Y7/4 淡黄緑	
12	六	29	東野遺区 E1室南端下層	土師器	羽釜	26.6	(12.8)		密	良好	10Y7/2 淡黄鉄	
12	六	30	東野遺区 E1室南端下層	土師器	羽釜	27.2	(13.85)		密	良好	10Y7/2 紅点ノ黄緑	
12	六	31	東野遺区 E1室内15cm下打	土師器	羽釜	(31.6)	19.6	11.0	密	良好	外2 10Y7/4 紅点ノ黄緑 内2 5Y7/4 紅点ノ黄鉄	
12	六	32	東野遺区 E1室内	土師器	羽釜	28.0	(17.5)		密	良好	外1 10Y7/4 紅点ノ黄鉄 内2 5Y7/4 紅点ノ黄鉄	
12	六	33	東野遺区 E1室内(西表)	土師器	羽釜	34.7	(11.6)		密	良好	外2 5Y7/2 黄鉄 内1 5Y7/1 灰白	
12	六	34	東野遺区 E1室通風管一段下打	土師器	鍋	30.4	(6.7)		密	良好	外1 10Y7/4 紅点ノ黄鉄 外2 10Y7/4 紅点ノ黄鉄 内1 10Y7/4 紅点ノ黄鉄	
12	六	35	東野遺区 E1室通風管一段下打	土師器	鍋	28.6	(6.0)		密	良好	外1 10Y7/4 紅点ノ黄鉄 外2 5Y7/4 紅点ノ黄鉄 内1 5Y7/4 紅点ノ黄鉄	
12	六	36	東野遺区 E1室通風管一段下打	土師器	鍋	32.8	(5.6)		密	良好	外2 5Y7/4 紅点ノ黄鉄 外1 5Y7/4 紅点ノ黄鉄 内1 5Y7/4 紅点ノ黄鉄	
13	七	37	東野遺区 E1室上層	白磁	皿	9.2	2.8	5.2	密	良好	紫7Y8/4 灰白 紫7Y8/4 灰白 紫7Y7/2 灰白	
13	七	38	東野遺区 E1室上層	白磁	碗	13.4	(2.2)		堅緻	良好	紫7Y8/1 灰白 紫7Y7/2 灰白	
13	七	39	東野遺区 E1室上層	白磁	碗	15.2	(2.6)		堅緻	良好	紫7Y8/1 灰白 紫7Y8/2 灰白	
13	七	40	東野遺区 E1室上層	白磁	碗	17.1	(2.7)		堅緻	良好	紫7Y8/1 灰白 紫7Y8/2 灰白	
13	七	41	東野遺区 E1室内	白磁	碗	18.0	(1.8)		堅緻	良好	紫7Y8/1 灰白 紫7Y7/2 灰白	
13	七	42	西瀬遺区 E1室一段下打	白磁	碗		(1.5)	5.6	堅緻	良好	紫7Y8/1 灰白 紫7Y7/2 灰白	

付表2 出土遺物観察表

神宮 番号	回 番号	遺構 番号	遺構	種類	器形	法量			胎土	焼成	色調	備考	
						口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)					
13	七	43	東洋窯 第二遺構(一段下付)	青磁	壺	10.8	(8.3)		密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面 陶1379-4底面		
13	七	44	東洋窯 第一遺構	青磁	壺		(8.1)		9.6	密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	45	東洋窯 第一遺構(一段下付)	青磁	椀	25.0	(6.1)			密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	46	東洋窯 第二遺構(土層)	青磁	椀	15.0	(1.5)			密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	47	東洋窯 第一遺構(土層)	青磁	椀	12.3	3.4	5.5		密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	48	東洋窯 第一遺構(土層)	白磁	椀	17.3	(3.7)			堅緻	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	49	東洋窯 第一遺構(土層)	青磁	椀		(3.6)		6.0	堅緻	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	50	東洋窯 第一遺構(土層)	青磁	椀	14.6	7.4	5.8		密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	51	東洋窯 第二遺構(土層)	青磁	椀		(4.2)		6.0	精良	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	52	東洋窯 第一遺構(土層)	青磁	椀		(2.7)		6.7	密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	53	東洋窯 第一遺構(土層)	青磁	椀		(3.3)		5.9	堅緻	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	54	東洋窯 第一遺構(土層)	緑釉	椀		(1.4)		4.6	密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
13	七	55	東洋窯 第一遺構(土層)	国産陶磁	すり鉢	24.5	(5.1)			密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	備考
13	七	56	東洋窯 第一遺構(土層)	国産陶磁	埴	12.7	(2.7)			密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	肥前
13	七	57	東洋窯 第一遺構(土層)	国産陶磁	椀	11.0	5.0	4.5		精良	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	肥前
13	七	58	東洋窯 第一遺構(土層)	国産陶磁	椀	10.6	5.9	4.6		堅緻	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	肥前
13	七	59	東洋窯 第一遺構(土層)	国産陶磁	壺		(15.6)		13.8	密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	信濃
13	七	60	東洋窯 第二遺構(土層)	国産陶磁	皿		(1.3)		8.2	密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	肥前
13	七	61	東洋窯 第一遺構(土層)	土師器	茶釜	3.2	(3.3)			密	良好	陶1379-1底面 陶1379-2底面 陶1379-3底面	
15	73	74	東洋窯 第一遺構(土層)	土師器	皿	5.2	2.4			密	良好	15793-1底面 15793-2底面 15793-3底面	
15	74	75	東洋窯 第一遺構(土層)	土師器	甕	13.8	(3.4)		やや粗	良好	良好	15793-1底面 15793-2底面 15793-3底面	
15	75	76	東洋窯 第一遺構(土層)	瓦器	杯	10.8	3.05	7.8		密	良好	15796-1底面 15796-2底面 15796-3底面	
15	76	77	東洋窯 第一遺構(土層)	瓦器	椀	14.3	(2.5)			密	良好	15796-1底面 15796-2底面 15796-3底面	
15	77	78	東洋窯 第一遺構(土層)	瓦器	椀	14.3	(2.5)			密	良好	15796-1底面 15796-2底面 15796-3底面	
15	78	79	東洋窯 第一遺構(土層)	瓦器	椀	5.2	(1.1)			密	良好	15796-1底面 15796-2底面 15796-3底面	
15	79	80	東洋窯 第一遺構(土層)	瓦器	羽釜					密	良好	15796-1底面 15796-2底面 15796-3底面	脚部
15	80	81	東洋窯 第一遺構(土層)	瓦器	羽釜					密	良好	15796-1底面 15796-2底面 15796-3底面	脚部
16	八	81	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(唐)	開元通宝								621年
16	八	82	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(宋)	咸平通宝								995年
16	八	83	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(宋)	天聖元宝								1023年
16	八	84	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(宋)	天祐通宝								1086年
16	八	85	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(宋)	順寧元宝								1068年
16	八	86	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(宋)	元豐通宝								1078年
16	八	87	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(宋)	皇寧通宝								1038年
16	八	88	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(宋)	紹寧元宝								1094年
16	八	89	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(宋)	聖宋元宝								1101年
16	八	90	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(明)	永樂通宝								1408年
16	八	91	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(清)	道光通宝								1821年
16	八	92	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(和)	寛永通宝								1659年
16	八	93	東洋窯 第一遺構(土層)	銭貨(和)	寛永通宝								1659年

图 版



石列検出状況（北より）



第3遺構面全景（北東より）



第2遺構面全景（北西より）



焼土層断面（南西より）



柱穴検出状況（北より）



羽釜出土状況



埴出土状況



井戸SE27検出状況（北より）



焼石出土状況



焼土検出状況（西より）



銭貨出土状況

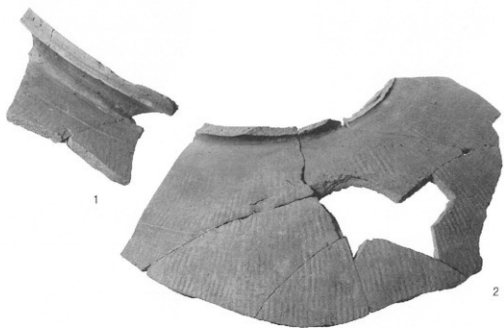
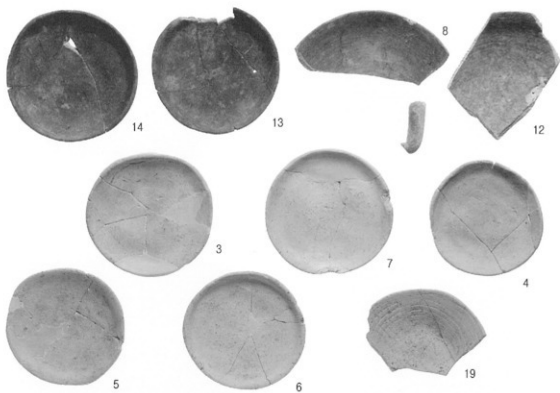


道路状遺構検出状況（南西より）



道路状遺構検出状況（上面より）

図版五 広瀬遺跡出土遺物（土師器・瓦器・須恵器）





24



30



25



32



26



27



29



34



57



60



59



58



56



55



43



46



53



49



44



51



47



37



48



45



41



40

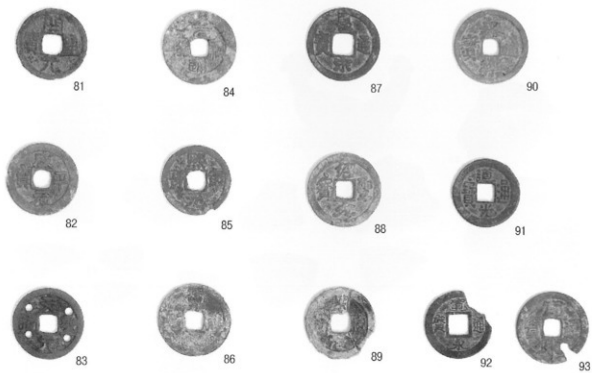
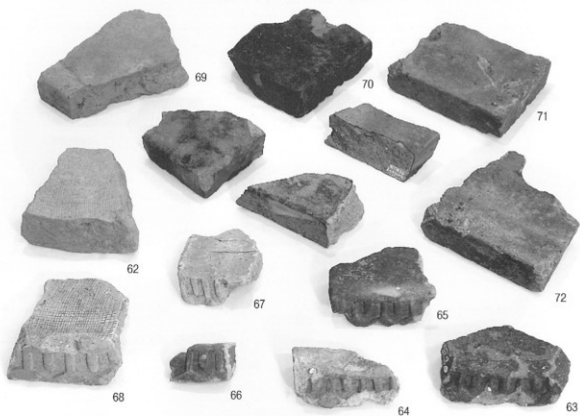


38



39

図版八 広瀬遺跡出土遺物（瓦・埴、錢貨）



報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	広瀬遺跡発掘調査概要報告
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第23集
編著者名	久保 直子、木村 友紀、坂根 麟
編集機関	島本町教育委員会事務局 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL.075-961-5151
発行年月日	平成25年3月29日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
遺跡範囲								
ひろせ いせき 広瀬遺跡	しまもとちょう 島本町広瀬 一丁目地内	27301	14	34° 53' 5"	135° 40' 4"	2012.2.20 ～ 2012.4.20	400㎡	店舗建設に伴う遺 跡範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広瀬遺跡	集落・道路	奈良時代～江戸時代	柱穴・井戸・側溝 道路	羽釜・瓦・埴・須恵器 ・土師器・輸入陶磁器 ・国産陶磁器・銀貨	なし

島本町文化財調査報告書
第23集

発行 島本町教育委員会
〒618-8570 大阪府三島郡島本町板井二丁目1番1号
☎ 075-961-5151

発行日 平成25年3月29日

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区紙町通竹隈町下ル弁財天町300
☎ 075-256-0961

